

また、お軽勘平の道行を独立した踊りに仕立てたのが、『落人』とも呼ばれている『道行旅路花簪』。天保四年（一八三三）三月江戸河原崎座で『裏表忠臣蔵』に初演された清元の踊りで、作者は三升屋二三治。本来は三段目の裏なのだが、道行景事なので四段目のあとに上演される。裏門の趣向をそっくりとり、新口村の詞章を準用したもののだが、はなやかな一場物なので、本作の通し狂言の時にも「裏門合点」に代えてよく上演される。舞踊のおさらいにも、本作の通し狂言の時にもよく上演される。

四段目―來世の忠義

〔梗概〕扇ヶ谷上屋敷。口は「花籠」、切を「判官切腹」、アトとして「城渡し」。

閉門を仰せつけられた判官を慰めるため奥女中が籠に入れたいけ花を献上することがある。そこへ石堂と薬師寺兩名の上使があらわれ、判官に対して切腹を命ぜられた旨を伝える。判官はかねての覚悟でただちに白装束となり切腹する。腹に突き立てたとたん大星由良之助がかけつける。「待兼ねたわや、この九寸五分は汝へ形見」といつて果てる。あと顔世をはじめ、家来一同して遺体を駕籠にのせて菩提所光明寺に送る。そのあと家臣がお金配分か城をまくらに討死かと評定したが、結局は仇討の盟約をして城を明け渡すことに終る。

〔演出・特色〕歌舞伎でも「花献上」を出すことはまれである。いったいにこの段は深刻沈痛な場であるから、義太夫の語物としても、九段目に次ぐ重要な語物とされ、人形芝居では「通さん場」と呼ばれて、客の出入りや弁当・菓子・茶などの持ち運びなども遠慮する場面ということになっている。またこの幕は判官の後始末をしようまでは目を大きく見開かないで、薬師寺以外のすべての人が中眼でいることが口伝とされている。上使の石堂と薬師寺とは立役と敵役との典型的なもの。由良之助を心待ちにしつつ切腹の座になる判官もむずかしい役。力弥に由良之助の参着をたずねるのは、浄瑠璃では一回だが、歌舞伎では二回にして哀愁を盛り上げるのに成功している。

由良之助の「かけつけ」の型には古来種々の工夫がなされた。山本京四郎という俳優は、黒小袖に小紋の上下、印籠と巾着まで下げ、両手をふってかけつけ、花道の真中でキッと見やつて大小を抜き捨て、本舞台末座に平伏し、石堂のことばを待ってにじりよった。初世坂東彦三郎は上下に高股立をとり、膝に三里紙をあて、背中に鞭をさした形で揚幕の中に待機し、出るなり鞭を捨て、股立を引き下げ、馬から飛びおりて直ぐかけつけたつもりで舞台付際で大小を抜きすて平伏した。初世沢村宗十郎は、茶小紋の上下に脇差だけをさし、刀を手に持って袴の紐をむすびながら出て花道の半ばで平伏した。初世尾上菊五郎は茶の熨斗目に褐色の上下で手をこまねいて出た。坂田半五郎は小紋の上下の上に木綿の腹巻をくるくる巻いて、大小とも柄袋をつけ、かけながら出て花道の半ばで柄袋をはずしてかけつけた。中山文七も花道の途中で柄袋をはずした。市野川彦四郎は上下の上へ馬鞭をさし込んで出た。尾上新七は大小の下緒を口にくわえ、袴の紐を結びながらかけつけて、花道の半ばで平伏した。その他あるいは鉢巻を挟み入れながら出たり、髪を乱し、衣紋を乱して、花道で放心したようになつたり、刀を杖によるめて出た人もあつた。現今の型は九世團十郎によるもので、ばたばたと出て花道にすわり、懐中へ手を入れるしぐさをする。それは腹帯をゆるめるためとしめなおすためともいわれている。

判官の遺体を駕籠におさめてからたく香は判官に扮する俳優が自前で購入するので、その香が場内にただようのも一つの効果になる。江戸時代は、他の役者がやりにくいので、判官役者は役が済んだら直ぐ帰宅したという。

評定の場も歌舞伎のほうがずっと劇的になっている。城明渡しは、原作ではほんの一行程度のもんだが、歌舞伎では塩治館門外という由良之助にとって重要な場面となっている。はやりたつ諸士を「まだ簡が若い若い、引こう引こう」と納得させて引きとらせたあと一人になって、浄瑠璃では判官の死直後にある「血に染まる切先を打ち守りく、拳をにぎり、無念の涙はらくく」をここに移し、手に持つ提灯の紋所を切りぬいて懐中し、切腹した短刀を出して切つ先の血をなめ、あるいはじつと見やつて決意を新たにし静かに立ち去る。この間に城門が二回ほど打ち返して遠見になる、あるいは道具を後方に引いて城から遠くなつたように見える演出は、明治以後のことだというのが効果的である。鳥の声を聞かせるのも効果的。文楽の人形浄瑠璃では、歌舞伎をとり入れているところが相当にある。

五段目―恩愛の二玉

〔梗概〕口を「ぬれ合羽」、または「鉄砲渡し」、奥を「二つ玉」と分けて語る。

お軽の実家に身を寄せ、獵師となつた勘平は、夜の山崎街道で大雨を松かげによけている。そこへ通りかかった千崎弥五郎と対面し、仇討ちの企てを聞き、御用金を持って義士への参加を願う。鉄砲

渡しというのは、勘平が消した火縄に火をうつしてもううために提灯を借りる。そのとき胡散くさそうにするので鉄砲を弥五郎に渡して火を借りるからである。二人は左右に別れた。お軽の親与市兵衛は、勘平には明かさずに女房のお軽を祇園町に沈め、その半金の五十両を持って来る。そのあとを追ってきた斧定九郎がこれを殺害して五十両の金を奪う。しかし定九郎はまもなく猪とまちがえられて勘平に撃たれる。勘平は定九郎の懐中から縞の財布にはいった五十両の金を財布ごと奪い、御用金として弥五郎に渡そうと道をいそぐ。

〔演出・特色〕歌舞伎でも鉄砲渡しは上場しないことがある。上場しても浅黄幕の外に一本の松の木をおけば足りる。定九郎は原作では花道から与市兵衛を追いかけて出るのだが、現今の演出では、舞台の掛け稲の中から手を出して財布を奪い、刺し殺すのである。これは四代目市川団藏が与市兵衛と定九郎とを早替りで演じた時に始まるが、二役替らずとも効果的なので定着し、文楽までもそれにならうようになった。

もう一つ、定九郎の扮装は、明和三年（一七六六）九月市村座で、初代中村仲藏が、五分の月代、引解（冬に用いた袴の裏を引き解いて綿を抜き、夏の単衣としたもの）の黒小袖黒羽二重の紋付、茶小倉（木綿織）の帯、朱鞘の大小、草履、破れ傘、顔も手足も白塗りの浪人の扮装で、「腕まくりし、三の頭（馬の三頭から転じて人の尻の上部）まで裾からげ、傘の雫を払い、鬢に水を含み、ドラドラと雫が落ちる、袂袂を絞る、血紅腹に塗り、口から吹き出し、喉す」所作を工夫し、大成功して、以来定型となった。これも文楽に襲用されている。それまでは初演から、相中（名題のすぐ下に位置する役者の格付）の役で、「山岡頭巾に大縞のどてら、丸グケの帯、紐付き股引き、重ねわらじ」だった。金井三笑との意趣の故に、この役が仲藏に振り当てられたのだという。仲藏は、湯島の妙見様へお参りの途中の雨宿りで出会った、浪人の出で立ちを取り入れて工夫し、初日まで隠して観客や周りを唖然とさせた。あまりの反応に仲藏自身が損じたと思ってしまうほどであった。（落語「仲藏」）

「二つ玉」という呼び名は揚幕の中と花道に出てからと、勘平が二回鉄砲をうつからだともいうし、二倍の強葉で発砲するからだともいう。おそらくは前者であろう。またこの場の勘平の演出形式は、きわめて美しい和事味のものであるが、現行の演出は三代目菊五郎および五代目菊五郎により洗練されたものといわれている。上方では、与市兵衛・定九郎・勘平の三役を早替りで演じる型が伝わる。

六段目―財布の連判

〔梗概〕与市兵衛住家。義太夫では「身売」「勘平腹切」と分たれる。

山崎村の百姓与市兵衛のうちでは、女房とお軽とが与市兵衛の帰りを待っている、祇園町の一文字屋の亭主が駕能をつらせてお軽を受け取りにくる。渡す渡さぬと問答の末身売りしたお軽をつれていこうとする。そこへ勘平がもどってきて押しもどし、はじめて一部始終を聞かされる。そうして一文字屋が与市兵衛に金を渡す時に貸してくれた縞の財布が、定九郎から奪いとった財布と同一であることを知り、急に親殺しと信じて、その罪におののく。お軽が別れを惜しんで連れていかれたあと、千崎と原郷右衛門の二人侍が来て勘平の不信をなじり昨夜の金を返す。勘平は進退きわまって切腹する。二人は与市兵衛の死体を改めると鉄砲きずではなく刀きずだとわかり、勘平の潔白が証明されたので連判の列に加え、勘平は血判をして息絶える。

〔演出・特色〕歌舞伎でも一編中、世話狂言の味で最も見ごたえのする場面。原作では一文字屋の亭主だけ出るのが歌舞伎では一文字屋の女房にし、判人（女術、術は売意の源六を出すのが現今の定型になっている）。

勘平の演出は、前幕同様三代目・五代目の菊五郎の演出が基礎になっていて、帰った勘平がすぐ浅葱色の紋服に着替えて幕切れまでこれで通す他、財布を対照して見るとき、二人侍のとめ方、切腹の段取など口伝や芸談がたくさんある。与市兵衛女房の名は原作にはないが、明治前後からおかやとなつた。お沢とかお宮とか呼んだ時代もあった。初演の時には吉田文三郎が人形を遣っただけに大役である。勘平の落入る前に「色にふけたばっかりに……」というせりふがある。これは原作にはなく、近世の添加であるらしいが、まことに適切な増補だといってよい。音羽屋型では、ここで血のついた掌で頬に血糊を付ける。上方では、千崎・原が遺骸の傷を確かめている間に、勘平が腹を切る、など、独自の型が伝わる。

七段目―大尽の錆刀

〔梗概〕祇園一力の場。

茶屋の一方で酒と女とに放蕩を尽すように見せかけている由良之助の真意を知るために、スパイとなった九太夫が伴内と共に尋ねてきて酒宴になり、主君の速夜になまぐさ物の蛸をたべさせようとす

る。由良之助は平気でたべて酔いつぶれる。またその帯刀が鑄刀であることを知って敵討する心はあるまいと悟らせる。そのあと、人が去ったのを確認して由良之助が顔世御前からきた密書を開いて読み始めると、離れの中二階からお軽が合わせ鏡で、床下で九太夫がこれを読もうとする。由良之助はお軽を連れ出して刺し殺そうと身請けすることにする。そこへお軽の兄で足軽の寺岡平右衛門がやってきてお軽に会い、由良之助の近況を聞き、また父や夫の横死を語り、お軽を殺してそれを功に連判の列に加わろうとする。その忠誠を知って由良之助は、お軽を助けてスパイ九太夫を刺させ、平右衛門を一味に加える。

この段は義太夫では掛合の場で、語物としては重きをおかれていないが、茶屋場と呼ばれ、にぎやかなうちにも切迫感と哀愁とをたたえ、歌舞伎では由良之助役者にとつて野心的な場である。前半を蛸肴と呼んでいるが、酔態のうちに正気をみせ、粹人のうちに家老たる品位ある武士を見せるといふむずかしい役がらである。九世団十郎をして五世坂東彦三郎には及ばないと述懐させたという。蛸肴の条には酒宴の座興に「見立」ということがあつて、幫間（ばんま）にふんした俳優が当代の時事をあて込んだ滑稽をやる（「助六」の通人などと同じ行き方である）。由良之助が顔世からの手紙を読む件は、由良之助・お軽・九太夫三者三様の構図が様式的に美しい。「青海苔もろうた返札に太々神楽打つようなもの」という由良之助のせりふは、沢村宗十郎のせりふ回しを、浄璃もとり入れたと伝えられている。力弥から密書を受け取つて、「敵と見えしは群れいるかもめ……」と謡をうたつてまぎらすのも歌舞伎の好演出。江戸と上方で、大道具などもかなり異なる。

また、平右衛門は色奴の典型。お軽との兄弟愛、小者の悲哀が表現される。平右衛門がお軽を見て「髪の飾りに化粧してその日その日は送れども、可愛や妹、わりや何事も知らねえな」というせりふも歌舞伎の発明である。

八段目―道行旅路の嫁入

〔梗概〕景事（舞踊劇）。

加古川本蔵の後妻戸無瀬と義理ある娘の小浪とが、京都山科の大星の閑居に在る力弥のところへ押掛嫁に行く道行。富士を背景にした東海道。旅姿の母と娘がおりから通る嫁入りの行列を見てうらやましがらる。

〔演出・特色〕歌舞伎ではあまり上演されない。「お軽勘平の道行」ができてからはなおさらである。原作は義太夫だが、常磐津では「其儘旅路の嫁入」といい、奴の関助が道中のおどけぶりをみせ、女馬士（めうま）がからんだりする。清元の曲ではおかげ参りがからむ。

九段目―山科の雪転

〔梗概〕口が「雪転」、切が「山科」。

雪深い山科の大星由良之助の閑居。由良之助が酒に酔つて幫間や仲居をお供に、雪こかしをして雪だるまを作りながら、祇園から朝もどりして奥で休んでしまう。そこへ加古川本蔵の妻戸無瀬と娘小浪（由良之助息力弥の許嫁）が尋ねてきて嫁入を申し入るが、由良之助の妻お石は、主君を抱き止めて本意をとげさせなかつた本蔵の娘は迎えられぬと断るので、戸無瀬は小浪を手にかけて自らも死のうとする。その時門外に虚無僧が『鶴の巢籠』の尺八を吹きながら現れる。奥からはお石が「自害御無用」と声をかけ出て、本蔵の首を婿引出にするならば祝言は許すと言う。虚無僧は本蔵で、力弥に鎌で刺さた上、本心を明かして、小浪のことを頼み、師直邸の絵図面を渡して死ぬ。

〔演出・特色〕この主役は本蔵であるが、はじめは敵役のちに「千本桜」の権太や「布引滝」の妹尾と同じく「戻り」になり、善心を吐露する役になっている。浄瑠璃の語物としては、『忠臣蔵』中でも第一とされている。初演の時、竹本此太夫が好評であったが、中日も過ぎてから由良之助の人物を遣っていた吉田文三郎から此太夫に注文が出た。雪持竹のくだんといわれる「雨戸をはずすが工夫、仕やうをここに見せ申さんと、庭に折しも雪深く」の「庭に折しも」を今少し長く語るように主張した。それは由良之助が座敷からおりて竹の所まで行く時間が短かすぎるといふのであつた。けれども此太夫はすでに開演後一〇数日もたつてのことだし、それはできないこととわつた。紛争をつづけたうえ文三郎の主張を通して、座頭の此太夫が退座するという事件があつた、という逸話が残っている。しかし、歌舞伎では、近年は由良之助でなく力弥にその役をさせる。

雪深い山里で、命を懸けて子の幸せを願う本蔵・戸無瀬夫婦の緊迫した情愛を描く。純白の白無垢の小浪、緋の着付の戸無瀬、黒の虚無僧装束、『鶴の巢籠』の尺八がその親心を象徴する。緊迫感と色彩美は抜群の場面。歌舞伎では戸無瀬と由良之助とを二役替る演出もある。初代尾上菊五郎が始めたもので、三代目・六代目も演じたが、手順にかなりの無理がある。また、戸無瀬・本蔵・由良之助